はじめに

北海道の大豆の収量は近年かなり増加してきているとはいえ、他の作物の急増に比べると増加率はなお低い。大豆は冷害を受け易く、収量の年次変動が大きいことなどの他に、ダイズわい化病やダイズシストセンチュウ等の病害虫による被害も大きいことなどが、本道の平均収量向上の隘路となっている。

ダイズわい化病は昭和２７年に発生が認められ、昭和４６年には北海道全域に大発生し大きな問題となった。中央農試では、大豆育種指定試験地が昭和４１年に設置されて以来、本病の原因解明と対策の確立につとめてきたが、ジャガイモヒゲナガアブラムシにより媒介されるウイルス病であることを明らかにし農薬による防除法について一応の対策が確立された。しかし、薬剤による防除では一次感染は防げないことから耐病性品種の育成を大きな育種目標として、育種事業を進めてきている。

昭和４１年以降、国の内外から広く育種母材を収集し、それらについてダイズわい化病抵抗性の検定を行った結果、ほ場抵抗性を示す数品種を見出し、これらが育種母本として利用されてきている。

これまでの間に抵抗性品種探索のために収集された品種、系統は膨大な数となったが、収集探索を開始して１６年を経過した現在、これを整理、記録しておくことは今後のダイズわい化病抵抗性品種育成上極めて有意義であると考えて概略をとりまとめ、今後の研究の参考に供する次第である。

昭和５７年７月

北海道立中央農業試験場長

中　山　利　彦